

# オーストラリアキチヌの種苗生産

藤本 裕・山本隆司\*・村越正慶・加島浩二\*\*

## 1. 目 的

栽培漁業センターの生産目標である20万尾を生産するため、技術開発と並行して生産を実施する。

## 2. 方 法

親魚は、全て種苗生産後養成したもので、合計80尾を2水槽（飼育水量25m<sup>3</sup>）に収容した。1区は当センター内で養成していたもの39尾（3才魚及び5才魚平均尾叉長36.8±3.9cm、平均体重1.35±0.4kg、♀：30尾、♂：8尾、不明1尾）で、2区は養殖業者から購入した41尾（3才魚、平均尾叉長33.5±1.8cm、平均体重1.06±0.2kg雌雄比不明）である。収容は平成元年1月中に終了した。飼料は主として配合飼料にビタミン剤を添加して投与した。産卵が順調でないと判断されたため2区の親魚に3月1日と3月23日の2回、ゴナトロピンを1,000IU/尾、背筋部に注射した。

採卵は夕方ネットを設置し翌朝回収した。

飼育水槽は当初1m<sup>3</sup>ポリカーボネイト水槽に収容し、日令43日に2.5m<sup>3</sup>角型FRP水槽へ移槽して飼育を継続した。

投与した餌料はワムシ（日令3～40日）及びマダイ用配合飼料（日令25～55日）、魚卵（日令26～55日）、オキアミ・キビナゴミンチ（日令42～55日）である。

ワムシは、ナクロロプシス及び油脂酵母で二次培養後、10～25個体/mlになるよう投与した。飼育水は日令20日まではほぼ止水状態で以後微流水から始め最終的には14回転/日まで増量した。

## 3. 結果及び考察

種苗生産結果を次表に示す。

仔魚飼育は大量減耗もなくほぼ順調に推移し、ミナミクロダイとほぼ同様の方法で飼育可能であることがわかった。しかし生産数は採卵が不調で大型水槽を使った大量種苗生産が出来ず目標の20万尾を大きく下回り15,000尾であった。

産卵があったのは、4月末の採卵ネット設置を終了するまでに、1区が6回、2区が13回だけで産卵量も32万粒/日が最高であった。また浮上卵率も1区が0～46.2%、2区が0～65.9%で大半は20%以下であった。産卵が順調でないと判断されたためゴナトロピン打注を行ったところ、

\*：現所属；水産試験場八重山支場

\*\*：臨任職員

2回とも3日後に産卵があったが、大量産卵には至らなかった。

採卵が不調であった原因は明確ではないが、雌雄比のアンバランスあるいは親魚水槽への収容の遅れが考えられた。  
親魚養成について早急に対策を考慮する必要がある。

平成元年度オーストラリアチヌキの収容と種苗生産結果

項目 区分	収 容					取 り 揚 げ					備 考				
	飼育水量 ( $m^3$ )	月/日	卵 数 (千粒)	ふ 化 仔魚数 (千尾)	ふ化率 (%)	密 度 (千尾/ $m^3$ )	卵 径 ( $\bar{x} \pm SD \mu$ )	月/日	日令 (日)	尾 数 (尾)		密 度 (尾/ $m^2$ )	生残率 (%)	平均全長 ( $\bar{x} \pm SD mm$ )	期間中の 水 温 ( $^{\circ}C$ )
1	1.0 → 2.5	3/14	32	30	93.8	30	891 ± 9	5/9	55	15,000	6,000	50.0	21.8 ± 2.3	18.9 ~ 22.9	日令43日 1.0 → 2.5 $m^3$